

インタビュー：失われた余暇を求めて ——近現代イギリスのレジャーと感性の歴史——

上智大学英文学科教授 小林章夫

INTERVIEW

IN SEARCH OF LOST LEISURE TIME: A HISTORY OF LEISURE AND SENSIBILITY IN MODERN BRITAIN

Akiko KOBAYASHI, Professor of English Department, Sophia University

In Britain, the aristocracy remained central to leisure culture until the early 18th century. Possessing huge landholdings managed by their servants, they literally constituted a “leisure” class, and during the eight months of the year when they stayed in their countryside manors, these upper-class men spent most of their time hunting and the upper-class women held parties, played cards or went out walking. This lifestyle of upper-class people was revealed to ordinary people through the social events at London during the so-called “season” from April to July. In particular, the wealthy “upper middle class” (the superior group of urban middle class) people in the 19th century yearned to lead aristocratic lives and began to spend their spare time in aristocratic pursuits, that is, in leisure activities. That aestheticism of leisure peculiar to the U.K., which originated in the aristocracy and spread to the common people, includes enjoying “unhurried time.” Leisure time is unhurried precisely because it is spare time, and it is a typical aestheticism in the U.K. to consider it a “luxury.”

K：小林章夫

I：石関亮（京都服飾文化研究財団アシスタント・キュレーター）

I：今号の『ドレスタディ』のテーマは「余暇^{レジャー}」です。近代以降、それまで貴族階級の特権だった〈余暇〉がより一般的な階層にまで広がって、さまざまなレジャー文化が花開くわけですが、ヨーロッパの他国に先駆けていち早く近代化を成し遂げたイギリスでは、いかにしてレジャーが浸透していったのか、お話を伺いたと思います。

K：中産階級以下の階層にとっては、おっしゃるとおり近代以降、それもかなり進んでからじゃないとレジャーなんてほとんど考えられません。近代の入り口、少なくとも18世紀の初めぐらいまでは貴族階級がレジャー文化の中心でした。

イギリスの貴族というのは、イタリア、フランス、スペインといった、ヨーロッパの中心文化の貴族に比べると後発の階層になります。例えば、イタリアだと遠く中世に遡る旧家がたくさんありますが、イギリスの場合、少なくとも爵位を持つ貴族というのは、大体16～17世紀につくられたものです。歴史

的にはイングランド王ヘンリー8世 [1491-1547] が、アン・ブーリンとの再婚問題でローマ・カトリック教会と断絶してイングランド国教会を立ち上げるときに、それまでカトリック教会が持っていた土地や建物を没収して自分の臣下に分け与えたことから始まります。

その後、17、18世紀になると国家への貢献の恩賞として、国王から土地と爵位を与えられて貴族になる者が多く出てきます。一番典型的な例は、チャーチル元首相の祖先ジョン・チャーチル [1650-1722]、すなわち初代モールバラ公爵です。彼はスペイン継承戦争 [1701-1714] で大変な勲功を上げて公爵の位を得るのですが、さらに当時の国王アン女王から広大な王室の領地を拝領し、邸宅建設の費用も公費で賄ってもらいます。その邸宅が、オックスフォードの郊外に今でも残っている「ブレナム宮殿」です。

イングランドは強大な力を持っていた国のように思われがちですが、少なくとも16世紀まではスペインとフランスの後塵を拝していました。イングランドは海を隔ててヨーロッパ大陸と離れていたのも、こう言うのはなんですが、田舎の国です。それが、18世紀半ばにはフランスと肩を並べるぐらいにまで力を付けてきます。やがて、産業革命を経て、19世紀に植民地をあちこちにつくり、大英帝国へと発展していきますが、その過程に合わせてイングランドの貴族階級も増え、力を付けていくのです。

どこの国でもそうですが、貴族階級というのは自分たちで直接何か働いて金を稼ぐわけではなく、広大な土地を持っていて、それを農民に貸して地代を受け取ったりしながら運営して、あとはゆったりと暮らします。しかも、具体的な運営作業は執事などがやります。貴族階級は「有閑」階級だと言われますが、まさしく18、19世紀のイングランド貴族の基本的な姿です。

それから、イングランド貴族らしいな、ということは、本拠地となる自分の領地がほとんど田舎にあることです。1年のほぼ3分の2にあたる8月から翌年3月までの間は田舎で暮らして領地経営をしています。暖くなる4月から7月にかけてロンドンに出てきて他の貴族と社交生活を繰り広げますが、8月になると田舎に戻る。先ほど申し上げたように、自分では何もせず任せっきりですから、3分の2の期間をどうやって暮らすかが1つのポイントになってくるのです。

I：時間を持て余してしまうわけですね。

K：そうです。その有り余るぐらいの時間をどうやって退屈せずに暮らせるか、退屈にどれだけ耐えられるかがイングランド貴族の条件である、と彼らは自虐的に言います。

では実際に何をしていたのかというと、貴族男性の場合には狩猟です。イギリスでは貴族の屋敷を「カントリー・ハウス」と言いますが、その定義は、敷地内でキツネ狩りができることである、と言われます。キツネ狩りというのは、まず犬をけしかけて、その後ろを馬に乗った貴族たちがついていながらキツネを追い詰めるスポーツです。それで日中全部を費やすわけですが、そんな狩猟がやれるぐらいの敷地の広さを持ってなきゃいけない。先程のチャーチル家のブレナム宮殿なんて成田空港のおよそ6倍の広さだといいます。

キツネ狩りは「ハンティング」ですが、他にも銃を使って敷地の中に飛んでいる鳥を撃ち落とす「シューティング」も行います。こちらは近代に入ってから行われるようになります。

しかし、女性の場合、ほとんどハンティングなんかやりません。では、貴族女性が有り余る時間をど

う使うかという、パーティーです。他の貴族の一家を招いて行うので、パーティーを催すには準備にも時間がかかります。どんな人たちに来てもらうかを決めて招待状を出す。振る舞う料理の献立をどうするか、何日泊まってもらうか、部屋割りをどうするか……、いろいろ考えながら準備にあたる。そして、実際にお招きした一家を数日にわたって接待する。もちろん、逆に呼ばれることもあります。

あとは、そういう機会がないときには家で何をしているかという、ほとんどの場合、トランプです。

I：本当に、時間を潰す、という感覚なんですね。

K：そうですね。その他にもう1つ、「ギャラリー」があります。カントリー・ハウスには非常に広くて長い廊下ギャラリーがあって、そこに自分たちがグランド・ツアーで買い集めてきた大陸の絵や美術品などが飾ってあるのですが、天候が悪いときなどにはその廊下を行ったり来たりします。それがアート・ギャラリーの発祥であると言われています。

I：庶民の視点からすると、狩猟をしたりパーティーを開いたりというのは贅沢なものだと思うのですが、当時の貴族に関してはあまり贅沢をしているという気持ちはないようですね。

K：ないですね。キツネ狩りをするにも、敷地内にキツネがいるというのがまず条件になりますが、それを狩り出すために日頃から犬や馬を訓練しなければならないし、そのための専任の人間を抱えなければいけません。それだけでも大変な維持費がかかるわけです。その生活は、貴族の屋敷で働いている奉公人ぐらいしか見ることのない、一般の人々には縁遠い世界です。

ただ、そんな貴族の暮らしの一端を、一般人でも見ることのできる時期があります。すでにお話ししたとおり、4月から7月にかけて、貴族たちはロンドンに集います。彼らが「シーズン」と呼ぶ社交の季節です。今でもアスコットの競馬やウィンブルドンのテニスなどの行事が6、7月に行われますが、それはそういった貴族の社交生活の名残です。その様子をロンドンに住む都市中産階級の人々はわずかながら目にすることになります。

I：市井の人々から見ると貴族の生活が贅沢なものとして映って、それが憧れへとつながるようになる……。

K：そうです。18世紀後半になると、貴族の家でも跡取りとなる長男以外の次男、三男を、貿易などで財を成した中産階級の家と縁組みをすることが多くなります。娘の家にとっては貴族の家系に連なるステータスがもらえますし、貴族の次男、三男にとっては自分の生活を娘の家の財産でより豊かに過ごすことができるわけで、一種の政略結婚です。

I：貴族と中産階級の境目が段々と曖昧になっていきますね。

K：イギリス貴族の歴史をたどった本などを見てみますと、大体1880年頃がイギリス貴族の頂点だと考えられています。ヴィクトリア女王時代の後期で、大英帝国が世界にその権威を発揮していた時期です。1つには、社会的に力を得ていた中産階級が金銭的にも貴族を追い抜く力を持つようになることが挙げられます。中には植民地との貿易などで貴族を上回るほどの豊かな暮らしを始める者も出てきます。

もう1つは、工業社会化が進んでいく過程で、伝統的な土地経営のやり方を踏襲しているだけでは自分たちの暮らしが成り立たなくなったからです。以前、イギリスで中産階級以下の庶民階層の勤め先とし

て非常に多かったのは貴族の屋敷でした。それが商工業に従事したり会社勤めをする人が増えてきて、20世紀に入ると、召し使いという職業が廃れてしまいます。大きなカントリー・ハウスの経営には何十人もの召し使いが必要になりますが、人的にも金銭的にもそれが厳しくなります。さらに、第二次世界大戦前後になると、貴族階級が持つ土地への固定資産税や相続税を上げて、そこで得た金額を社会福祉などに回そうとする政策を政府が進めるようになります。貴族にとっては、自分たちの持つ広大な土地の維持に加えてそこにかかる税率が高くなりますから、とんでもないことです。

結局、昔ながらの生活を維持できなくなって、土地を手放す貴族も出てきます。一番多いのは、歴史的建造物や景観を保護する目的で19世紀末にできた民間団体「ナショナル・トラスト」に自分の家や土地を一旦売却したり寄付したりした後、そこから借りて住むことです。一種の節税対策です。

また、夏季に自分たちのカントリー・ハウスを一般開放して入場料を取ったり、テレビドラマや映画のロケ地に貸したりして維持費を捻出することもあります。

I：凋落する貴族とは逆に、台頭する中産階級の暮らしはどのようになっていたのでしょうか。

K：中産階級は、基本的に商業、貿易、あるいは家内制工業といったもので金を稼いでいく階層です。それが、大英帝国の植民地拡大と植民地網の発達に従って、その植民地経営、あるいは植民地との貿易で稼いだ階層が中産階級の上位クラスを形成します。彼らはイギリス独特の言い方で「アッパー・ミドル」と言います。

彼らは貴族の暮らしに憧れ、近づこうと励みます。例えば、基本的に都会暮らしなので、そこに立派な邸宅を構えてパーティーをします。それから田舎に土地を買ってセカンド・ハウスにします。貴族とは違って、1~2ヶ月くらいの短い期間しか居られませんが、そこで田舎暮らしの一部を味わうようになります。

召し使いを雇う余裕が出てくると、何か時間を過ごすための遊びを探すようになります。そうすると、基本的に今までレジャーに縁がなかった階層にも、徐々にレジャーが広がる。その一番の典型は、海水浴です。19世紀初めに海水浴がイギリスで始まります。イギリス南端の町ブライトンなどが海水浴ブームでにぎわうようになります。もちろん最初に訪れたのは、上流階級の連中ですが、結局、労働者にも広まっていきます。20世紀に入ると、ロンドンの煤煙の中で働く工場労働者が日曜日、新鮮な太陽の光を求めて汽車に乗ってブライトンまで日光浴と海水浴のためにくる……。

I：その他にもスポーツや旅行などもこの頃登場しますね。

K：18世紀までは、貴族の子弟のほとんどが自分の屋敷に住み込みの家庭教師を抱えていました。それが18世紀の終わりになると、彼らは全寮制のパブリック・スクールへ通うようになります。イートン、ハロー、ラグビーなどの名門校です。そこでは団体生活のルールとリーダーとしての統率力を学ぶ名目で、スポーツが行われます。それがクリケットであり、ラグビーであり、少しあとになりますが、ホッケーです。イギリスの典型的スポーツとも言えるクリケットは、1試合するのに3日ぐらいかかることがあります。

I：そんなにかかるものなんですか？

K：はい。ですから、途中でティータイムを挟んだりしますね。まさに時間が有り余っている階層のスポーツです。ポロにしても馬に乗れなきゃしょうがない……。完全に王室中心のスポーツです。

面白いのは、庶民はサッカーを好みますが、アッパー・クラス以上の人にとって、スポーツはクリケットやポロ、ラグビーです。これは今でもそうです。

I：熱狂的なサッカー好きの国というイメージだったのですが……。

K：いや、あれは庶民の世界です。その辺りでは階級の差が、いまだに強く残っています。

ただ、いずれにしろどのスポーツも、競技場の規格などの共通ルールが定められて近代スポーツとして生まれ変わるのは大体19世紀半ばです。それまでサッカーは村と村との境界線を挟んだ対抗戦でしたし、ボクシングも単なる殴り合いでした。他にもラグビーやクリケットなども、誰でもできるものとして形式が定まっています。

それから、イギリス人らしい余暇の使い方だな、と思うことは、「歩くこと」です。イギリスには「パブリック・フットパス public footpath」と呼ばれる公共の自然遊歩道があります。イギリス中にあちこち張り巡らされていて、普通の遊歩道もあれば、どこかの農家の軒先みたいなところもあったり、中には崖になっているところを綱を使って下りていくような高度なものもあるんですけど、そこを日曜日にサンドイッチと飲み物を持って1日ぶらぶら歩いて過ごしたりします。ガイドブックもたくさん出ていて、それを見ながら、「あ、ここの道を行こうか」と言いながら、トレッキングしたりして……。このような遊歩道が作られ始めたのも19世紀の終わりです。

似たようなレジャーとしては、ナショナル・トラストが所有する貴族の屋敷が一般開放される時期に訪れて、お茶を飲んだり、ご飯を食べたり、散歩したりして1日をその広い敷地でのんびりと過ごします。それから、比較的多くの人に愛されているのは、ガーデニングです。他にも、日本でもブームになっている「アフタヌーン・ティー」の習慣があります。イギリスの伝統のように思われていますが、これも19世紀後半に生まれたものです。

ただ、1つ面白いのは、庶民階層にも昔から楽しみがありまして、それは上流階級と一緒に「賭博」です。貴族と庶民の接点を見つけるといって、僕は賭博だなあ、と。賭博が階級を超えてあの国には蔓延っていて、それが余暇の使い方の1つになっています。

I：近代以降、イギリスでは貴族階級だけでなく中産階級や労働階級にも余暇が浸透していくわけですが、そのなかで受け継がれているもの、現在まで流れているものを考えるとすれば何になるのでしょうか。

K：それはまさにレジャーの原点といえるもので、〈ゆったり流れる時間〉ではないでしょうか。時間の流れがゆっくりしていること——これは少なくともかつてのイギリスの1つの美学であり、イギリスの本当の意味での〈ラグジュアリー〉です。余暇の時間というのはまさに余暇だからこそゆったりしたものであり、それが豪華なんだ、という意識です。

20世紀に入り2つの大戦を経て、イギリスは植民地を失いました。大英帝国がただの小さな国に成り下がり、1960年代から70年代には、イギリスは「病める老大国」と言われ、「英国病」について盛んに語られ、IMFの緊急融資まで受けて、経済的にもどうしようもなくなっていました。

一般の人々にとっても厳しい時期だったはずなのに、彼らは失業しても「そんなのはまあいいや。時間ができたんだから」とパブに行ってビールを飲んでのんびりしている……。70～80年代、私がイギリスにいたときでも、失業とか物不足とかいろいろ言われながらも、人々は割とゆったり暮らしていました。シティーのサラリーマンですら昼食はビールを飲みながら大体1時間半ぐらいとっていましたね。

I：そうなんですか。

K：イギリスは豊かだなあ、と、むしろその時思いました。一般の庶民が時間をかけてゆったりと昼食をとるような生活ができるのは、時間がそれだけゆったりと流れているからだ、という印象を非常に強く持ちました。

ところが、今、イギリスに行くと、70年代、80年代のゆったりした雰囲気が完全になくなっています。サッチャーさんの政策が効を奏して、90年代からイギリスは大変な好景気になった代償でしょうか、今やシティーのビジネスマンが昼食にかける時間は15～20分くらい。スターバックスでコーヒーやサンドイッチを買ってきて、コンピューターを睨みながら仕事している……。

I：日本のサラリーマンのようになっていますね。

K：なっています、完全に。随分イギリスはせっかちな国になったという印象です。それこそラグジュアリーではなくなっていますね。いわゆるグローバリズムで、イギリスのよさと言えるものが徐々に変化しつつあります。田舎にはまだ残っているとされていますが、それもいつまで続くかわかりません。

I：現在の日本でも田舎暮らしがゆったりとした時間を過ごせる場所として非常に注目を集めています。イギリスでも聞くとところによると、大陸との所得差を利用して、例えばフランスの片田舎に週末過ごす家を持って、平日はロンドンで働くというようなライフ・スタイルをとる人が増えているそうです。

K：夏をスペインで過ごしたり、フランスやイタリア、そこまでいかずとも、ウェールズやスコットランドの片田舎に家を買って週末はそこで暮らしたり、そういったゆったりした生活を望んでいる人たちはまだ残っています。

ただ、それがイギリスという島国だけの問題でなく、EUなど他の地域とのつながりの中でどのように変わっていくのか気になるところです。

I：ありがとうございました。

小林章夫 (こばやしあきお)

1949年、東京都生まれ。上智大学大学院文学研究科修了ののち、同志社女子大学教授を経て、現職。専門はイギリス文学、文化。主な著書に『コーヒー・ハウス』、『イギリス紳士のユーモア』、主な訳書に『ワイン物語』などがある。

(※肩書は掲載時のものです。)